

アンのおしゃべり

アンの話が続いて恐縮ですがもう 1 回。随想のタイトルどおり「気まま」です。なんといっても今年は原作の出版から 100 周年の佳節。トップページの写真も本年中はこのままいくつもりです。アンとのツーショットが 2 枚もあり、少々入れ込み過ぎかもしれませんが、シニアおじさんの楽しい旅の思い出なのです。

なぜ私がそんなにアンに惹かれるのか。それは何事も前向きにとらえていく彼女の明るいキャラクター、そのかわいなおしゃべりとあふれる想像力でしょう。

「いいお天気の朝で、とても嬉しいの。でも雨の朝も、好きよ。どんな朝でも、ワクワクするわ。今日一日、これから何が起きるか、想像の余地があるでしょう」(第 4 章 グリーン・ゲイブルズの朝：松本侑子訳、以下も)

「私の経験から言うと、物事は楽しもうと思えば、どんな時でも楽しめるものよ。もちろん、楽しもうと固く決心することが大事よ」(第 5 章 アンの生立ち)

「・・・寝室は、眠るためにあるんだよ」「まあ、マリラ、夢を見るためでもあるわ。美しいものに囲まれた寝室の方が、いい夢がみられるでしょう？」(第 16 章 お茶会、悲劇に終わる)



“腹心の友” ダイアナとアン

すべてを前向きにとらえ、人生を楽しみ、夢を広げていくアンの生き方がほうふつとしてきます。

「人に謝って許されるって、ほっとして、気が楽になるわね。今夜は、星がきらきらしているわ」(第 10 章 アンのお詫び)

「明日は、まだ何の失敗もしていない新しい一日だと思うと、ほっとするわ」(第 21 章 風変わりな香料)

自分の失敗をすなおに詫げる純粹さ。また失敗の多い日々のなかでの乙女のやさしい心に読者は親近感を抱き、さらに、明るく毎日を生きようとするその考え方を、自らの人生に取り込もうとするでしょう。

こうして、しゃべりだしたら止まらない彼女に対するマリラの言葉も楽しい。

「アン、一つ言えることはだね」マリラが言った。「バリー家の屋根から転がり落ちても、あんたの舌は、かすり傷一つ負わなかったってことだ」(第 23 章 アン、名誉をかけた事件で、憂き目にあう)

今まで子どもを扱ったことのないマリラが、戸惑いながらもアンのしつけをしていく。愛していながらも、不細工がゆえにやさしく振る舞えないマリラのアンに投げかける言葉。

一方、クリスマスに彼女が欲しがっていたパフスリーブのドレスを贈ったマシューのや

さしさ。それは初めに彼女の引取りを断ろうとしたマリラとの対話に表れています。

・・・マシューは口ごもった。「だが、そのう、あの子を引きとるのは、やっぱり難しいかのう」「当たり前ですよ。あの子が私たちの何の役に立つんですか」「でもなあ、わしらが、あの子の役に立つかもしれないよ」（第3章 マリラ・カスバートの驚き）

「わしらが、あの子の役に立つかもしれない」——なんという温かなマシューの心！やがて、マリラもアンを心底から愛するようになり、彼女の情愛も一層深まっていくのです。

物語の最終段階では、そんな二人に育てられたアンの成長ぶりが出てきます。



「クイーン学院を出た時は、私の未来は、まっすぐな一本道のように目の前にのびていたの。人生の節目節目となるような出来事も、道に沿って一里塚のように見わたせたわ。でも、今、その道は、曲がり角に来たのよ。曲がった向こうに、何があるか分からないけど、きっと素晴らしい世界があるって信じるわ」（第38章 道の曲がり角）

最終章——競争の激しい大学への奨学金試験を

千草の束が広がるプリンスエドワード島 勝ちとり、洋々とした前途が開けた矢先にマシューの突然死と、グリーン・ゲイブルズを手放さなくてはいけないというマリラの苦悩……。それを知ったアンは、ここまで育ててくれた二人への恩と愛情に、進学をあきらめ村に居残ることを決めるのです。

マシューとマリラの二人がアンを育てていくなかで、人間的に成長していく姿が、同じ年代のシニアの私たちにも何かを示唆してくれているような気がします。そんな感動を、このホームページで紹介するほか、地域のシニア向けの会報やメキシコの旅行誌にも寄稿しました。東京のドン・キホーテとアンの「出会いの物語」なのです。